朱子に於ける太極と理氣の關係

坂柳童麟

朱子の學說は宋代の他の儒者の場合に於けると同樣に天人合一思想物我一體觀の地盤の上に立つて宇宙の大法則を最後の歸結點として、人生上の諸問題を決定してゐる。從つて動靜無端無始無終の天道が人間の上に顯現したものが人の本性であり、その本性に準據する時に人道が確立するのである。故に朱子の學說を明らかにするには先づその哲學を形成してゐる太極思想及び理氣の問題を明らかにせねばならぬ、殊に太極と理氣の思想を統一的に組織づけて考へることは宋學の組織者である朱子の根本的な立場を知るに最も重要なことであると思ふ。

今私は斯る理由のもとに朱子の太極思想と理氣思想を總括的に統一して一の私案を提出するのである。

是に於て注意せねばならぬ事柄は、朱子の哲學の根底となつてゐる太極から導き出された時の理論に於ては宇宙間一切の森羅萬象に理の遍在を認め、その理から人間の本性を說明し、道德の本源を說明してゐるが、一方倫理問題に於て人々が實際に實踐窮理せねばならぬ所謂理とは現今の自然科學の對象となつてゐる如き廣汎な眞理を指すのではなくて、主として道德の分野に限られてゐることである、故に或見方によると朱子が千萬言を費して論議した形而上學の太極や理氣の理論は、その主張せんとする道德論の徹底を期する必要上から本體論宇宙論に及び、遂に幽玄高遠な無形而有理の論議となり、今に至るも確然と決定し得ない理氣說となつたが、朱子自らの意圖を求むるならば儒教傳來の實學の宣揚、日用倫常の實踐道德の闡明に在つて、その爲に哲學を利用したのであるとも云ふことが出來るのである。

故に無極而太極なる太極思想から直接に演繹された場合の理論と、實際道德から歸納された場合の理論とは處々に喰

ひ違ひを生じて朱子畢生の努力によつて組織された哲學大系では、その不一致が完全に克服されてゐない。これが朱子の學說を難解ならしめる一因でもあり、陸子一派から朱子の學說は支離であると非難される一因ともなつてゐる。

然しこの不一致は當爲の法則である所の道德律と必然法則である自然の法則との一致を求むる千古の欲求ではあるが千聖の共に遭遇した一大難關であつて、その不成功は朱子一人の苦悶でもなければ失敗でもなかつた。兎に角朱子の學說に於て此の點に大きな喰ひ違ひのあることを認めぬわけにはゆかぬ。故に若し朱子の本意が今論じた如く人倫道德を理論的に組織して、其の基礎を鞏固にする爲に利用された本體論であるとすれば、太極思想から演繹される朱子の形而上學の理論を追求して行くのみでは、朱子の本旨は得られないかも知れないが、既に朱子の立場が天人合一の形而上學から出發した哲學大系を通して人の本性を說明し、人の踏むべき道德法則を說明してゐる以上、朱子の學說を知るには先づその太極論と理氣論を知る必要がある。今はこの兩者の關聯に特に重心を置いて論じて見たいと思ふ。

而して朱子の太極思想は周濂溪の作と云はれる太極圖說の所謂無極而太極の思想を承け繼ぎ、理氣思想は張橫渠及び程伊川の思想を繼承したものと云はれてゐるが、その組織は未だ十分に完成されては居らず次の如き大きな問題を提出してゐる。

一、太極と理氣の關係如何

二、理一元論なりや理氣二元論なりや

此の二問題に就いて後藤俊瑞氏は臺北帝國大學研究年報の中で、太極を形相因となし、一氣を質料因となして形相因と質料因の二元卽ち太極と一氣の二元の渾一體こそ朱子の本體論の眞相なりと斷定されて次の如く云はれてゐる。

朱子は太極と一氣との二元の渾一體を以つて究極の本體と考へ、その太極を以つて一切形相の因となし、その一氣を以つて一切質料の因と考へたのである。

太極は存在の當初から既に動靜して形相因として活人、故に一氣も亦存在の當初から既に動靜聚散等の形相を附與せ

られて除陽二氣の形をとる。是れが太極陰陽相卽不離の◎であつて、之こそ理氣二元渾一的本體の經驗界への最初の發展なのである（臺北帝國大學文政部哲學科研究年報第三）。

右の後藤氏の說によると形相因である太極と質料因である一氣とは對立してはゐるが、二者が渾一體とならねば經驗界の事象を生ずる本體とはなり得ないが故に朱子の本體論は理氣二元卽ち太極と一氣との渾一的本體論であると斷定されたのである。

然し朱子語類や朱子文集に集められてゐる朱子の本體論殊に太極圖說解などに見る限り太極と除陽二氣の竝存は屢〻說明されてゐるが、太極と一氣との竝立對立は少しも說かれてゐない、氣は常に理と對立して說かれてゐて太極と對立しては說かれてゐない、故に私は此の示唆に富む後藤氏の形相因と質料因の二元渾一體の理論を以て朱子の本體論となすことには滿足出來ない、私の考では朱子は理氣を常に對立させ、その上に太極を置いて最後の一と考へてゐたものと推定される、故に極言すれば朱子は太極一元論と云ひ得るのではないかと思ふ、今はこの推定を根據づけることによつて論を進めて行く。

（イ）朱子の太極とは

太極の太は形容であつて朱子も餘り說明してゐない、極に就いては陸象山などが中と解してゐるのに對して朱子は極とは至極の義であり標準の名であつて、常に物の中央にあつて四外が之を望む如き存在である、從つて在中の準的と爲すは可なるも、中と直に解することは不可であると屢〻論じてゐる、卽ち最後の一なることを强調してゐる。

聖人之意正以其究竟至極無名可名、故特謂之太極、猶曰舉天下之至極無以加此云爾、初不以其中命之也、至如北極之極屋極之極、皇極之極民極之極、諸儒雖有解爲中者、蓋以此物之極嘗在此物之中、非指極字而訓之以中也（朱子文集卷三十六答陸子靜書）。

蓋皇者君之稱也、極者至極之義標準之名、常在物之中央、而四外望之以取正焉者也、故以極爲在中之準的則可、而

便訓極爲中則不可、若下北辰之爲天極、脊棟之爲屋極上、其義爲二尤近一（朱子文集卷七十二雜著皇極辨）。

などゝ極の意味が中でなくて窮極の本源の意味であることを屢〻説明してゐる。而して朱子が太極と云へるは必ず太極圖説の「無極而太極」と云へる文に見えてゐる思想を少しも離れないのである、故に今引用した陸象山に答へた文中にも「至極無名可名、故特謂之太極」と云ひ、所謂太極は單に物質上の本源と考へられる繫辭傳に見ゆる太極とは異り有無兩思想の融合した思想であるから、朱子は太極を通常理と云ふ文字で説明してゐる。太極は理なりの此の説明から朱子が理一元論者である如く云はれてゐる。又時には太極は氣なりとも説明してゐる所があつて、太極が或は理と説明され或は氣と説明されてゐて、太極と理氣との關係が不鮮明であるから、朱子は理一元論者たらんとしたけれども遂に理氣二元論者に終つて仕舞つたと解する人もあるのである。

然し朱子が長い歳月の間沈思默考の後陸子一派からの激げしい非難攻擊にも拘らず、多くの問題の附隨してゐる太極圖説を周子の親作であると主張し、その中心思想である無極而太極なる有無融合の太極思想を本體論の根本として最後まで敢然と固執して、その太極思想から理氣を導き出した朱子の本意が單なる理氣二元論でなかつたことは論ずる迄もなく明瞭なことであると思ふ。王懋竑曰、竊意亦成就壬辰（乾道八年）以前、至丁未（淳熙十四年）始作後記、以授學者、戊申二月（同十五年）則出兩解（太極圖解、西銘解）非幷出通書也梭山詆太（十六年間十七年間）極圖西銘（朱子年譜考異）黄瑞節曰朱子將終之前五日、猶爲諸生講太極圖、至夜分、則於是書蓋終身（鬻頭近思錄引性理大全）。

若し理氣二元論を唱へたのであつたならば一なる太極は如何に説明出來るか、又太極を度外視して朱子の本體論を論じ理氣を語ることは出來ない、故に朱子の本體論の根本となつてゐる太極思想の本意を求むるならば、此の一見矛盾した如き、收拾の出來ない樣にさへ思はれる所の或は理と云ひ或は氣と云つてゐる太極が元來一なる存在であつて見れば、時に理で説明し時に氣で説明してゐても太極に立つて見れば理氣共にその一面となつて仕舞ふ、卽ち理氣未分の所に一なる太極が考へられたのであるまいかと推定される。

若し然らば當時の禪家の本體論を形成してゐた起信論の所謂一心二門觀の唯心思想と非常に類似した思想となつて來る。

朱子の太極が理氣未分の所に考へられた一なる存在であると推定される最も有力なものは太極と萬有の關係に就いての朱子の說明である。

在天地言則天地中有太極、在萬物言則萬物中各有太極（朱子語類卷一）。

自男女而觀之則男女各一其性而男女一太極也、自萬物而觀之則萬物一其性而萬物一太極也、蓋、合而言之、萬物統體一太極也、分而言之、一物各具一太極也（太極圖說解）。

この說明に依ると萬有は太極の外に出ることは出來ない、萬有は太極の顯現に過ぎない、而もその萬有は小なる一太極であると云つてゐる說明を見れば、理一元論でもなければ勿論氣一元論でもなく、それらは皆太極と云ふ一に統一され、太極の一面と考へられる時始めて理氣が太極と矛盾せずに說明されるのではあるまいか。

（ロ）理としての太極

朱子の太極の考は理氣未分の所にあつて、太極は理なりとのみ云つたゞけでは朱子の立場は明らかにならぬと思ふ。此の點を明瞭にする爲に先づ太極は理なりと通常云つてゐる朱子の立場を追求して見る必要がある。

太極を宇宙萬物の本源となす思想は古くから支那にあつた、殊に繫辭傳には明瞭に此の思想が見えてゐることは萬人の知つてゐる所である。

然し、易有太極、是生兩儀兩儀生四象、四象生八卦と繫辭傳上に見えてゐる太極思想は實有の本源としての太極で、どこまでも「有」の方內に終始してゐる思想と考へられる。爾來儒教では物質又は質料的な實有の意味で太極を解してゐた。然し時勢と共に思想は深くなり擴大もされて、有の一面だけでは困果律の要求によつて萬有の窮極的本源の說明出來ないことは漸次知られて來た。太極思想も同樣にその內容が擴大されて有一面の易繫辭傳の太極に無の一面が更に

加へられて、萬有の本源である點に於ては有であるけれども、太極に於ては時空を超越して形の名づくべきものなく、無始無終動靜無端なる點に於て無の一面を帶びて來たのである。この有無融合した太極が周子の作と朱子の主張した太極圖說の所謂無極而太極の思想であり、これを繼承敷衍した朱子は太極を常に理の字で說明して

太極只是一箇理字（朱子語類卷一）。

太極只是天地萬物之理（朱子語類卷一）。

などゝ云つてゐる。無形無象であつて而も萬物の根元となつてゐる太極は理と說明するより外に說明することは困難であつたものか、朱子語類朱子文集などに集められてゐる太極に就いての朱子の說明は殆ど大半太極は理であるとの此の立場から說明されてゐる。

一切の物象はこの理によつて始めて物象を呈して現象體となり得るのである。この理は物象の奧に常に內在してゐて唯一絕對古今不變であるばかりでなく、萬物に遍在して缺ける所のないことは後藤氏が先に引用した文で形相因と說明して居られるが非常に示唆に富む語であると思ふ。氏は萬有に遍在してゐる理が形相であつて、太極がその形相を與へない限り氣のみでは物象となり得ることが出來ないことは次の如く說明されてゐる

氣によつて物の實體形骸は生ずるにしても此の形相が太極によつて與へられざる限りそれは差別相對の個物とはならず、陰陽とはならぬ、太極が形相を附與することによつて氣より成る物の實體も差別をもつ特殊個物となり、陰陽の範疇にも入り來ることが出來るのである（臺北帝國大學文政部哲學科研究年報第三輯　朱子の本體論一七九頁）。

と太極は理であつて、その理が氣と渾一體になつた時始めて「物」が生ずる、卽ち理が氣と渾融しなければ氣のみでは「物」となり得ないことを說明して居られる。この理對氣の相卽不離なこと、渾一した時始めて「物」となるとの說明は妥當と思はれるが、それを直に太極對氣の相卽不離の問題とすることには多少考慮の餘地がありはせぬかと思ふ。その理由の主なるものは後にも論及する如く、朱子は時には太極は氣なりと說明してゐる文があるばかりでなく、常に理と氣と

を對立さして說明してゐるが、氣を太極に對立さして說明してゐる文をまだ知らない點である。故に太極と氣を對立するものと考へて朱子の太極思想と理氣思想を解することは困難である。

更に朱子が太極は理であるとの立場から說明してゐる文を求むると次の如きものがある。

太極只是天地萬物之理、在天地言則天地中有太極、在萬物言則萬物中各有太極、未有萬物之先、畢竟是先有此理、動而生陽亦只是此理靜而生陰、亦只是此理（朱子語類卷一）。

理なる太極はそれが太極である時は天地萬物の理であるが、天地から見れば天地の中に太極があり、萬物の個々から見れば個々の萬物の中に太極があつて、而もそれは現在に遍滿してゐるばかりでなく、萬物の未だ存在しない以前にも此の理は存在してゐた、從つて未來に向かつても同樣であつて萬古不變過現未の三際に涉つて變移常なき森羅萬象に遍在してゐるものであると朱子は說明してゐる。

萬有の未だ存在しない以前から旣に存在して本來不變自若たる理から如何にして萬有が生ずるのであるか朱子はその生ずる經路を理があれば必ず氣の流行が附隨して生ずるものであり、氣の流行があれば當然萬物を生ずるものであると說明してゐる。

有是理後生是氣（朱子語類卷一）。

有此理便有氣流行發育萬物（同右）。

問理與氣、曰有是理便有是氣、但理是本、而今且從理上說氣、如云太極動而生陽、動極而靜、靜而生陰、不成動已前便無靜（朱子語類卷一）。

これらの朱子の理氣の說明は所謂理先氣後の說である、是に於て問題になるのは是の理あれば是の氣を生ずと云ひ、理あれば氣の流行ありと云ふ場合の理氣の先後とは如何なる意味の先後であるかである。

理が有つて其の後に氣を生ずの「生ず」とは理が氣を創造する意味に解するわけにはゆかぬ。萬古に亘つて自若たる

不變の理から形而下の諸の現象の因となる氣を生ずると說明することは論ずる迄もなく不可能である。此の「生ず」とは氣は理によつて始めて氣として成立する意味に解する方が妥當で、決して理が氣其物を生ずる意味と解することは出來ない。此の關係を後藤氏が理が氣に形相を與へた時に氣として成立すると云はれたのは既に引用した通りである。

又朱子が是の理があつて後に是の氣を生ずと云ひ、理があれば氣の流行が有ると云つたのは理の存在が氣の存在よりも時間的に先であるとの意味ではなく、理氣は同時同處にあることは朱子の常に說明してゐる所であつて、たゞ氣から生ずる陰陽と雖も理があつて始めて陰陽と成り得るが故に理論的に因果の範疇を當て篏めて畢竟この理が氣よりも先に存在して然る後に氣の流行があると云つたのである。此の關係に就いて朱子の說明を求むれば、

問有是理便有是氣、似不可分先後、曰要之也先有理、只不可說是今日有是理、明日却有是氣、也須有先後、且如萬乙山河天地都陷了、畢竟理却只在這裏、(朱子語類卷一)。

今日是の理があつて明日是の氣あると云ふ樣な時間的な先後でなく理論上の先後であることを朱子は更に說明して、問先有理抑先有氣、曰理未嘗離乎氣、然理形而上者、氣形而下者、自形而上下言、豈無先後、理無形、氣便粗有渣滓(朱子語類卷一)。

と云つてゐる點から見れば明らかに理先氣後とは時間上の問題でなく、理論上に於ける形而上と形而下との差異であつて、氣の由つて來る所を遡源すると此の理が有つて始めて氣が氣として成立するが故に理先氣後と云へるまでゞあつて理が別に一物となつて氣の先に存在するのではない。理は常に氣に掛塔してゐることは朱子も屢〻言つてゐる。

天下未有無理之氣、亦未有無氣之理(性理大全卷二十六)。

など〻理氣の同時同處なるべきを強く表明した文は處々に見えてゐる。

形而上と形而下の理由で理先氣後と朱子は云つたが、所謂理が形而上のものであることには別に問題は無いけれど、所謂氣が朱子の云へる內容で而も形而上であるや否やは問題である、卽ち

陰陽只是一氣、陽之退便是陰之生、不是陽退了又別有箇陰生(朱子語類卷六十五)。

と云へる場合の交流無窮の陰陽の道は經驗出來るけれども陰となり陽と變じて常に流轉して止まない、所謂一氣に至つては單なる形而下であり得ない、それは陰であるか陽であるかの流轉の迹から觀念的に抽象されたもので最早や經驗と超越した後藤氏の所謂質料因と云へる場合の因とも云ふべき先驗的なものである、朱子は一氣の動靜無端陰陽無始の此の有樣を說明して

動靜無端、陰陽無始、今以太極觀之、雖曰動而生陽、畢竟未動之前須靜、靜之前又須是動、推而上之、何自而見其端無始(朱子語類卷九十四)。

と云つてゐる、これ自己否定によつて動が窮れば靜となり靜が窮れば動となつて波の起伏の如く流轉する一氣は萬物の質料的根元となるが一氣そのものを經驗することは出來ない、更に朱子に依るとこの一氣はそれ自身に動靜することが出來ず、その動靜陰陽するのは皆理に本くと云つてゐる。

天地之間、只有動靜兩端、循環不已、更無餘事、此之謂易、而其動其靜、則必所以動靜之理、是則所謂太極者也(性理大全卷一)。

一氣は必ず陰陽動靜するものであつて、この陰陽動靜することを離れて一氣として別に存在するものでなく、この一氣をして氣たらしめる所以卽ち陰となり陽となるのは理としての太極によるのである、換言すれば理に動靜あるが故に氣に動靜があるのである。故に朱子は

理有動靜故氣有動靜、若理無動靜、則氣何自而有動靜乎(朱子文集五十六答鄭子上書)。

と云つてゐる、苟くも理に動靜があると爲す以上、理と氣の關係を體と用の關係を以て論ずるわけにもゆかぬ。

要之、朱子が太極を理となす立場を以てすれば理先とは理が萬古不變なものであることを語り、理ありて後に氣を生ずとはその理によつて氣が始めて氣として成立することを語ると解するより外に太極と理先氣後の問題を統一的に解す

る道はないと思ふ。

以上の如く論じて來ると朱子の理氣說は理一元論としての體系を完備してゐる如く思へるが、旣に萬物の質料的本源である一氣が先驗的なものである以上、朱子の說は理氣二元論ではないかとも思はせる、從つて朱子は理氣二元論者なりとの論も出て來るのである。今若し朱子が理氣二元論者であつたとしたならば本來二元である理氣と一なる太極との關係は說明出來ない、さればとて後藤氏の如く太極卽理なるの故に理氣とは太極と氣の問題であるとなすことも出來ない。

若し一氣を窮極の意味で實體であるとすれば同じく窮極的な意味で實體であるべき太極を理なりと說明した朱子の語を如何にしたらばよいか、若し又反對に一氣には實體性がないとしたならば、現實世界の森羅萬象の具體性は單に理と解せられる太極から說明出來るであらうか。

故に苟も當面の現實を問題にする限り理氣の二者に論及しなかつたならば說明することは出來ない、故に朱子は理氣相據りて「物」をなすことを語つて

所謂理與氣此決是二物、但在物上看、則二物渾論不可分開、各在一處、然不害二物之各爲一物也、若在理上看則雖未有物、而已有物之理、然亦但有此理而已、未嘗實有是物也(朱子文集卷四十六　答劉叔文)。

と云つてゐる、理氣は元來二物で現實の存在から見ると二者は分解することが出來ないけれども、それが二物であることには何等妨げがない、現象の存在しない先に旣に現象の理は存在してゐるけれども理だけでは現象とはなり得ない、一度現象となるには必ず氣が存在する、理があれば必ず氣が存在して萬有は始めて實有性を帶びるのである、このことを朱子は

問昨謂未有天地之先畢竟是先有理如何、曰未有天地之先、畢竟也只是理、有此理便有此天地、若無此理便亦無天地無人無物、都無該載了、有理便有氣流行發育萬物(朱子語類卷一)。

右の朱子の說明によつても明らかである如く太極は理なりだけでは萬有の實有性は說明出來ない。故に理あれば必ず氣

あり、その氣から萬有に實有性が賦與されるのである。斯くして萬有の實有性の由來は說明出來たけれども理一元の立場から萬有に實有性を賦與する一氣は說明出來ない。故に旣に論じた如く一氣に理と同樣に先驗的な實體性が認められてゐる以上朱子の理一元論は成立し得ないものと推定されるのである。

（八）　氣としての太極

朱子は通常太極は理なりと說明してゐるが、時には太極は氣なりとも說明してゐる。

一片底便是分做兩片底、兩片底便是分做五片底、做這萬物四時五行、只是從那太極中來、太極只是一箇氣、運運分做兩箇氣、裡面動底是陽、靜底是陰、又分做五氣、又散爲萬物（朱子語類卷三）。

太極は理なりと云つて理を萬物の大本となすも、萬物の質料の由來は理だけでは說明出來ないが故に質料を問題にして論ずれば太極は一氣とも云ひ得るのである、而して朱子は一氣が萬物の本源であることは屢〻說明してゐる所である。

天地之間一氣而已、分而爲二則爲陰陽、而五行造化萬物、始終無不管於是焉（周易啓蒙本圖書第一）。

蓋天地之間一氣而已、分陰分陽、便是兩物（朱子文集三十八答袁機仲別幅）。

天地只是一氣、便自分陰陽、緣有陰陽二氣相感、化生萬物、故事物未嘗無對（朱子語類卷五十三）。

これらの文は一氣から說き起して陰陽の生成を說き更に五行萬物の生成を說いてゐるも全然太極には觸れてゐない。然し一氣が分れて陰陽となると云ふ所を見れば旣に理なる太極が豫想されてゐるものと推定される。

朱子の文集及び語類等には右の如く現實の質料から一氣に推論した句はこの外にも實に多い。

天地之間、本一氣之流行、而有動靜爾……以其動靜分之、然後有陰陽剛柔之別也（易乾卦文言本義）。

二氣之分、卽一氣之運、所謂一動一靜、互爲其根、分陰分陽、兩儀立焉者也（朱子文集卷四十九答王子合）。

天地初間、只是陰陽之氣、這一箇氣運行磨來磨去、磨得急了、便拶許多渣滓裏面、無處出便結成箇地、在中央氣之淸者便爲天爲日月星辰云云（朱子語類卷一）。

陰陽雖是兩箇字、然却只是一氣之消息、一進一退、一消一長、進處便是陽、退處便是陰、長處便是陽、消處便是陰（朱子語類卷七十四）。

右に列擧した文には天地間は一氣のみ、一氣の運轉流行のみと說明してゐる、先に引用した太極は一箇氣なりとの朱子語類の文と共に此等の文を見ると朱子は氣一元論者の如くさへ思はれる、太極は氣なりとの立場から論ずれば氣は萬古氣であつて、絕對に自若たるものとなつて、氣はそれ自身獨自に陰陽動靜して萬象を現ずることになる、若し氣が獨自に動靜して萬物を化生するものであつたならば萬物が一氣の顯現であると云ふことは理解出來ても、自然界に整然たる秩序があり、四時の交替は萬古不變であり、萬物各〻その律に順據して生々化々する秩序卽ち自然の律は說明出來ない。萬物が一氣の動靜陰陽することに據つてのみ生ずるものであると爲すは換言すれば萬物の諸相は一氣が動靜陰陽する場合に偶然の結果として生じた所產となつて仕舞ふ。從つて條理整然たる萬物の實狀は理を考へずには說明出來ないのである。

又朱子は一氣を一元の氣と稱して萬物の生々化々を說明してゐる所もある。

天地別無勾當、只是以生物爲心、一元之氣運轉流通略無停間、只是生出許多萬物而已（朱子語類卷一）。

然し一氣を一元の氣となしてそれから萬物の生々化々を說明しても理を離れた氣のみから萬物が生々化々することを說明することは不可能である、故に朱子は理と氣の不可分なることを常に云つてゐる。

疑此氣是依傍這理行、及此氣之聚、則理亦在焉、蓋氣則能凝結造作、理却無情竟無計度無造作、只此氣凝聚處、理便在其中（朱子語類卷一）。

斯る理氣が不可分なものである說明は朱子文集朱子語類に非常に多く見えてゐる。

要之太極を一箇の氣と云へる朱子の說明は氣一元論の意味でなく氣の立場から見れば太極は一箇の氣とも云ひ得ると云つたまでであつて、旣に太極は理なりと常に說明してゐる以上朱子の氣一元論は勿論成立しないことは明らかである。

以上によつて朱子は理一元論者でもなければ勿論氣一元論者でもなく、更に理氣二元論者でもないことを槪見したの

である、然らば朱子の立場は一體何と解したらばよいか、太極は理氣の何れとも云ひ切ることは出來ない。又一方太極は理氣の抱合體であるかと云へば、抱合體と見れば二元論と何等選ぶ所のない結論になつて一なる太極は成立することは出來ない。故に徒に此等の朱子の言葉をその言葉の上だけで理解せんとすると太極思想と理氣との關係は支離滅裂になつてその歸趨は甚だ了解の出來ないものとなる。陸子一派から朱子の說が支離であると非難されるのには一理はあるが、此の一見相矛盾する如き或は理と云ひ或は氣と云ふ朱子の太極思想の說明を體系ある思想と考へるには太極は理氣未分のものであつて理も氣も太極の一面にすぎないと解する、强ひて名けると太極一元論とでも云ふ樣な考の外に朱子の太極と理氣の關係を統一あるものに解することは出來ないやうに思ふ。

故に朱子は多くの非難疑惑をも顧みず太極圖說を周濂溪の親作としたのみか圖說の卷頭にある無極而太極なる有無兩思想の融合した太極を世を終るまで力說して止まなかつたのである。